

●腹部超音波検査

	所見名	説明
肝臓	しぼうかん 脂肪肝	肝臓に脂肪が過剰に蓄積した状態です。糖尿病や脂質異常症などの生活習慣病と密接な関係があり、内臓脂肪型肥満や飲酒が原因であることが多いです。脂肪肝から肝硬変・肝細胞癌へ発展することがあり、脂肪肝が見られる人は生活改善が必要です。
	かんのうほう 肝嚢胞	液体が貯留した袋状の病変です。単発あるいは多発し通常は無症状ですが、嚢胞が大きくなると腹部膨満感、圧迫感等の自覚症状が認められることもあります。
	かんのいせっかい 肝内石灰化	肝臓にできたカルシウムの沈着のことをいい、エコーでは白く描出されます。肝臓に過去、損傷、結核、寄生虫、出血などが生じ、現在は治ってしまった場合が大部分を占め、放置しても差し支えありません。
	かんけっかんしゅ 肝血管腫	血管から構成される肝臓の代表的な良性腫瘍です。ただし、徐々に大きくなることもあり、経過観察が必要です。
	まんせいかんしゅが 慢性肝障害	肝障害が継続的に起こっている、あるいは起こっていたことが考えられます。慢性肝障害の原因として、飲酒、脂肪肝、B型肝炎、C型肝炎、自己免疫性肝疾患などがあります。原因を明らかにすることと、現在どの程度まで進行しているのかなど精密検査が必要です。
	かんしゅりゅう 肝腫瘍	腫瘍の可能性の低い結節像（炎症後の癒痕など）を肝臓に認めます。精密検査の必要はありませんが、経過観察が必要です。
	かんしゅよう 肝腫瘍	肝臓の腫瘍には良性腫瘍から悪性腫瘍まで色々な腫瘍があります。良性か悪性かの鑑別のため、精密検査が必要です。肝臓の悪性腫瘍には肝臓自体から発生した腫瘍（原発性腫瘍）と他の部位から転移してきた腫瘍（転移性腫瘍）があります。原発性腫瘍では肝臓がんが多くを占め、転移性腫瘍では、消化管、胆道、膵臓、子宮、卵巣等に発生した腫瘍からの転移が多くを占めます。
	かんのいたんかんかくちよう 肝内胆管拡張	肝臓内の胆管（胆汁の通り道）が通常より太くなっている状態です。その原因として、腹部超音波検査だけでは判別の付かない総胆管胆石や胆管腫瘍などがありますので、精密検査が必要です。

	<p>かんないたんかんけっせき 肝内胆管結石</p>	<p>肝臓内部の胆管にできた結石のことを指します。肝内結石症は他の胆嚢結石症や総胆管結石症と異なり、治療が難しくまた治療後の再発が高率です。肝内結石症の患者さんでは、胆管が膨らんでいたり狭くなっていたりしていることがしばしばあります。精密検査が必要です。</p>
胆のう	<p>たんのう 胆嚢ポリープ</p>	<p>胆嚢の内側にできる隆起です。人間ドック受診者の10%程度に見られると言われていています。10mm未満でかつ良性であることを示す所見が認められる場合は問題ありません。</p>
	<p>たんのうけっせき 胆嚢結石</p>	<p>胆嚢内に形成された結石のことで、胆嚢炎や胆管炎の原因となります。胆嚢壁の肥厚を伴う場合や結石の後方の胆嚢壁が十分に観察できない場合には、悪性腫瘍との鑑別のため精密検査が必要です。</p>
	<p>たんのうせんきんしゅしょう 胆嚢腺筋腫症</p>	<p>胆嚢の壁が全体あるいは限局的に肥厚する良性疾患です。経過観察が必要です。</p>
	<p>たんでい 胆泥</p>	<p>濃縮胆汁や感染に伴う炎症性産生物のことで、胆嚢がんなどの腫瘍と紛らわしい超音波像を示すため精密検査が必要です。</p>
	<p>たんのうへきひこう 胆嚢壁肥厚</p>	<p>胆嚢の壁が全体的（びまん性）に厚みを増しています。その原因として、慢性的な胆嚢の炎症などがありますので、精密検査が必要です。</p>
	<p>たんのうしゅりゅう 胆嚢腫瘍</p>	<p>腫瘍の可能性の低い結節像（炎症後の瘢痕など）を胆嚢内に認めます。精密検査の必要はありませんが、経過観察が必要です。</p>
	<p>たんのうしゅよう 胆嚢腫瘍</p>	<p>胆嚢には良性の腫瘍（多くの胆嚢ポリープ）だけでなく、胆嚢がんなどの悪性の腫瘍ができることもあります。腹部超音波検査のみでは、確定診断ができないことが多いので、早急に精密検査が必要です。</p>
	<p>たんのうしゅだい 胆嚢腫大</p>	<p>胆嚢が腫れた状態です。一番多い原因は胆嚢の炎症で、症状がなくても経過観察をお勧めします。胆管結石や腫瘍などにより胆汁の流れが滞った時にも認められ、この疑いがあれば精密検査が必要です。</p>

胆管	たんかんかくちよう 胆管拡張	肝外胆管（肝臓から十二指腸への胆汁の通り道）が8mm以上（胆嚢摘出後は11mm）に拡張した状態です。胆管結石や腫瘍が疑われる場合には精密検査が必要です。
	たんかんけっせき 胆管結石	肝外胆管（肝臓から十二指腸への胆汁の通り道）にある結石のことです。膵臓炎や黄疸の原因となるため早急に治療が必要です。超音波検査では胆道気腫と紛らわしいことがあります。
	たんかんしゅよう 胆管腫瘍	肝外胆管（肝臓から十二指腸への胆汁の通り道）にできた腫瘍であり、黄疸をきたすことがあるため早急に精密検査が必要です。
腎臓	じんのおほう 腎嚢胞	液体が貯留した袋状の病変です。単発あるいは多発し、加齢とともに発生頻度が増加します。良性病変で、放置してもよいのですが、嚢胞が大きく、周辺臓器への圧迫症状や破裂の危険性がある場合や、水腎症をきたす場合（傍腎盂嚢胞）などは治療（外科的手術など）の適応となることがあります。
	じんけっせき 腎結石	腎臓にできた結石です。10mm以下の結石は自然排石も期待できますので、十分な水分摂取などを心がけることをお勧めします。10mm以上の結石は、定期的な経過観察が必要です。結石が、尿路に詰まって水腎症をきたす場合や、腎盂全体に結石ができるサンゴ状結石などは治療が必要となることがあります。腰痛や腹痛などの症状がある場合には、速やかに内科もしくは泌尿器科への受診が必要です。
	じんうかくちよう 腎盂拡張	様々な原因で尿の流れが妨げられ、腎臓の中に尿がたまった状態です。軽度の場合は特に心配いりません。中等度から高度の場合は、結石や腫瘍が原因となっていることがあるため、精密検査が必要です。
	すいじんしょう 水腎症	腎盂拡張が中等度から高度の場合、水腎症と記載しています。超音波検査で結石や腫瘍が見えなくても、それらが水腎症の原因となっていることがあるため、精密検査が必要です。
	じんけっかんきんしぼうしゅ 腎血管筋脂肪腫	腎臓に発生する最も頻度の高い良性腫瘍です。腫瘍組織は血管・筋・脂肪から構成されます。基本的には経過観察でよいのですが、腫瘍が大きい場合は出血の危険性もあり、外科的手術の適応となることがあります。
	じんしゅだい 腎腫大	腎臓の大きさが、両側ともに12cm以上の時に、腎腫大と記載しています。糖尿病による腎症では、初期に腫大し慢性腎不全になっても萎縮しないことが特徴です。急性の腎不全や悪性病変で両側腎が腫大することがあり、精密検査が必要です。

	じんいしゆく 腎萎縮	腎臓の大きさが、両側ともに8cm 未満の時に、腎萎縮と記載しています。糖尿病の場合を除いて、慢性腎不全になると、一般的に腎臓は萎縮して小さくなっていきます。
	たはつせい のうほうじん 多発性嚢胞腎	腎嚢胞が多発した状態です。先天性と後天性があります。長期透析患者や末期の腎不全患者で高頻度に両側性、多発性の嚢胞がみられます。また、腎細胞癌の発生率が高いことが知られています。腎機能のチェックと定期的な経過観察が必要です。嚢胞内に充実成分（白い塊）を認める時は、出血や腎細胞癌の発生を疑います。
	じんしゅりゅう 腎腫瘍	腫瘍の可能性の低い結節像を腎臓に認めます。良性か悪性かの鑑別のために、精密検査が必要です。
	じんしゅよう 腎腫瘍	腎臓の腫瘍には良性腫瘍から悪性腫瘍まで色々な腫瘍があります。良性か悪性かの鑑別のため、精密検査が必要です。悪性腫瘍の代表的なものは腎細胞癌 です。
膵臓	すいかんかくちよう 膵管拡張	消化液である膵液は膵臓で作られ、膵管を通過して十二指腸に流れます。この流れが妨げられると上流側の膵管が太くなります。原因として膵石や腫瘍が考えられますが、原因を調べるために精密検査が必要です。
	すいのうほう 膵嚢胞	液体の入った袋状の病変です。膵液が溜まっている場合や、液体を産生する腫瘍ができています。小さくて単純な形の嚢胞は問題ありません。5mm以上の嚢胞や複雑な形の嚢胞は経過観察や精密検査が必要です。
	すいせき 膵石	膵管や膵実質内に認められる石灰化のことです。慢性膵炎に認められることが多く、小さいものは放置しても問題ありませんが、大きくなると石により膵液の流れが妨げられる場合もあります。経過観察が必要です。
	すいしゅりゅう 膵腫瘍	腫瘍の可能性の低い結節像（炎症後の瘢痕など）を膵臓内に認め、経過観察が必要です。大きさが15mm以上では精密検査が必要です。
脾臓	ひしゅ 脾腫	超音波で脾の最大径が10cm以上の場合を脾腫としています。軽度の脾腫は病気ではありません。原因が感染症（肝炎、マラリア、結核など）、腫瘍（リンパ腫、白血病、骨髄線維症など）、貧血、蓄積症（アミロイドーシス、ヘモシデローシスなど）、うっ血肝（肝硬変、バンチ症候群など）、膠原病など多岐にわたるため精密検査が必要な場合があります。

<p>ふくひ 副脾</p>	<p>脾臓の近くに脾臓と同じ組織像をもつ1～2cm大の腫瘤のことを副脾と呼びます。病的意義はなく特に治療の必要性もありません。</p>								
<p>ひないせっかいが 脾内石灰化</p>	<p>脾臓に部分的にカルシウムが沈着した状態です。病気ではないので心配はいりません。</p>								
<p>ひしゅりゅう 脾腫瘍</p>	<p>脾臓に超音波で白く映るしこりがある時に、脾腫瘍と記載しています。脾臓の血管が増えてできる良性腫瘍の血管腫などが考えられますが、一度は精密検査が必要です。</p>								
<p>その他</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="282 723 587 987"> <p>ふくぶ だいどうみやくりゅう 腹部大動脈瘤</p> </td> <td data-bbox="587 723 1431 987"> <p>心臓が血液を送り出す最も太い血管が大動脈で、その壁がもろくなり膨らんでこぶのように突出したり、風船のようになった状態を大動脈瘤といいます。原因の多くは高血圧と動脈硬化です。5cmまでの場合には経過観察、4.5cm以上になると精密検査となる可能性があります。</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="282 987 587 1252"> <p>ふくぶ しゅよう 腹部腫瘍</p> </td> <td data-bbox="587 987 1431 1252"> <p>胸部に対し、腹部の腫瘍という意味です。正確には、腹腔内腫瘍、後腹膜腫瘍（副腎・尿管・大動脈・下大静脈・交感神経幹などの腫瘍）、骨盤内腫瘍（膀胱・前立腺・直腸・卵巣・子宮などの腫瘍）が含まれます。腫瘍臓器の特定と良・悪性の鑑別診断のため精密検査が必要です。</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="282 1252 587 1516"> <p>ふくすい 腹水</p> </td> <td data-bbox="587 1252 1431 1516"> <p>腹腔内に貯留した液体を腹水といいます。性状により滲出性（炎症性腹膜炎、がん性腹膜炎）と漏出性（肝硬変ネフローゼ、蛋白漏出性胃腸症、肝静脈閉塞、心不全、アルドステロン症など）に大別されます。通常でも生理的に100ml未満の腹水が存在しますが、異常に増加する場合は精密検査が必要です。</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="282 1516 587 1805"> <p>きょうすい 胸水</p> </td> <td data-bbox="587 1516 1431 1805"> <p>胸腔内に貯留した液体を胸水と呼びます。性状により滲出性（悪性腫瘍、肺炎、肺塞栓症、ウイルス感染、尿毒症、膠原病など）と漏出性（心不全、肝硬変、低蛋白血症、ネフローゼなど）に大別されます。通常、胸腔内には生理的に20ml未満の胸水が存在しますが、異常に増加した場合は精密検査が必要です。</p> </td> </tr> </table>	<p>ふくぶ だいどうみやくりゅう 腹部大動脈瘤</p>	<p>心臓が血液を送り出す最も太い血管が大動脈で、その壁がもろくなり膨らんでこぶのように突出したり、風船のようになった状態を大動脈瘤といいます。原因の多くは高血圧と動脈硬化です。5cmまでの場合には経過観察、4.5cm以上になると精密検査となる可能性があります。</p>	<p>ふくぶ しゅよう 腹部腫瘍</p>	<p>胸部に対し、腹部の腫瘍という意味です。正確には、腹腔内腫瘍、後腹膜腫瘍（副腎・尿管・大動脈・下大静脈・交感神経幹などの腫瘍）、骨盤内腫瘍（膀胱・前立腺・直腸・卵巣・子宮などの腫瘍）が含まれます。腫瘍臓器の特定と良・悪性の鑑別診断のため精密検査が必要です。</p>	<p>ふくすい 腹水</p>	<p>腹腔内に貯留した液体を腹水といいます。性状により滲出性（炎症性腹膜炎、がん性腹膜炎）と漏出性（肝硬変ネフローゼ、蛋白漏出性胃腸症、肝静脈閉塞、心不全、アルドステロン症など）に大別されます。通常でも生理的に100ml未満の腹水が存在しますが、異常に増加する場合は精密検査が必要です。</p>	<p>きょうすい 胸水</p>	<p>胸腔内に貯留した液体を胸水と呼びます。性状により滲出性（悪性腫瘍、肺炎、肺塞栓症、ウイルス感染、尿毒症、膠原病など）と漏出性（心不全、肝硬変、低蛋白血症、ネフローゼなど）に大別されます。通常、胸腔内には生理的に20ml未満の胸水が存在しますが、異常に増加した場合は精密検査が必要です。</p>
<p>ふくぶ だいどうみやくりゅう 腹部大動脈瘤</p>	<p>心臓が血液を送り出す最も太い血管が大動脈で、その壁がもろくなり膨らんでこぶのように突出したり、風船のようになった状態を大動脈瘤といいます。原因の多くは高血圧と動脈硬化です。5cmまでの場合には経過観察、4.5cm以上になると精密検査となる可能性があります。</p>								
<p>ふくぶ しゅよう 腹部腫瘍</p>	<p>胸部に対し、腹部の腫瘍という意味です。正確には、腹腔内腫瘍、後腹膜腫瘍（副腎・尿管・大動脈・下大静脈・交感神経幹などの腫瘍）、骨盤内腫瘍（膀胱・前立腺・直腸・卵巣・子宮などの腫瘍）が含まれます。腫瘍臓器の特定と良・悪性の鑑別診断のため精密検査が必要です。</p>								
<p>ふくすい 腹水</p>	<p>腹腔内に貯留した液体を腹水といいます。性状により滲出性（炎症性腹膜炎、がん性腹膜炎）と漏出性（肝硬変ネフローゼ、蛋白漏出性胃腸症、肝静脈閉塞、心不全、アルドステロン症など）に大別されます。通常でも生理的に100ml未満の腹水が存在しますが、異常に増加する場合は精密検査が必要です。</p>								
<p>きょうすい 胸水</p>	<p>胸腔内に貯留した液体を胸水と呼びます。性状により滲出性（悪性腫瘍、肺炎、肺塞栓症、ウイルス感染、尿毒症、膠原病など）と漏出性（心不全、肝硬変、低蛋白血症、ネフローゼなど）に大別されます。通常、胸腔内には生理的に20ml未満の胸水が存在しますが、異常に増加した場合は精密検査が必要です。</p>								

<p>しんのうすい 心嚢水</p>	<p>心嚢水とは心臓のまわりを取り囲む袋である心嚢と心臓との間に貯まる液体のことです。原因として感染性疾患（ウイルスなど）、うっ血性心不全、腎不全、がん性心膜炎などがあります。通常、生理的に50ml未満の心嚢水が存在しますが、異常に増加した場合、心タンポナーデの予防のため精密検査が必要です。</p>
<p>せつしゅだい リンパ節腫大</p>	<p>リンパ節が腫れて大きくなっている状態です。超音波で短径7mm以上の場合をリンパ節腫大としていますが、10mmまでで扁平な場合には炎症による腫大が多く、経過観察をお勧めしています。それ以外の場合には腫瘍性（悪性リンパ腫、白血病、肉腫、転移性腫瘍など）の疑いがありますので、治療の要否や治療法の決定のため精密検査が必要です。</p>